

## 【21】 俳人 大高 翔 の世界に触れよう

俳人 大高 翔

俳句の学習では、自分の心に響く俳句を見だし、を読み味わうことが大切である。また、表現の仕方を工夫して俳句を作り、友達と感想を交流することも、俳句に親しむ効果的な方法として挙げられる。

徳島県出身である大高 翔氏の、日常生活を題材とした俳句を学習することで、生徒は俳句を身近な表現だと認識することができるだろう。また、大高氏の俳句を題材とし、使われている言葉を吟味することによって、ものの見方や感じ方を豊かにするとともに、俳句創作への意欲を喚起することができると考えられる。

### 1 プロフィール

俳人。1977年生まれ。13歳より作句。執筆を中心に講演や校歌作詞など幅広く活動している。ライフワークとして、子どもたちや初心者への作句指導を行っている。また、海外でも日本語や日本文化の魅力を伝える活動を展開している。2009年徳島県立徳島科学技術高等学校、2012年徳島県立鳴門渦潮高等学校の校歌を作詞する。2013年より徳島県阿南市の「阿南ふるさと大使」となる。

### 2 作品

体育館わたしのひとつが終わった夏  
春スキーさしだす君の手が欲しい  
ふくらんだかばん明日は始業式  
おはようの声がゆきかう更衣  
新学期となりの席の恋敵

『ひとりの聖域』 大高 翔 邑書林

すぐそばに明け方のおい夏休み  
捨てられるだけ捨てていこう春休み  
十九歳秋空に名を刻みたし

『十七文字の孤独』 大高 翔 角川書店

春暁の美しき眠りのつづきかな  
秋刀魚焼くいつしか君の妻となり  
名を呼んで子を振り向かず花の昼  
髪解きて秋思こぼるる洗面器  
光りつつ来たるべき恋待つ林檎

『〈キリトリセン〉』 大高 翔 求龍堂

### 3 著作から見られる俳句への思い

私は、中学一年生くらいから俳句を始めて、最初は難しいなと思いました。難しいからこそできるようになりたくてやめられなかったんです。十代の多感な時期に俳句が身近にあったので、性格の大部分は俳句が作ってくれたように思います。

「～かもしれない」とうじうじ迷っていると十七音からはみ出すので、自分の感情をある程度断定して表現するクセがつく。それで気持ちや考え方を切り替えて次に進めたような気がします。何が本質かという答えのない問いを続ける十代の頃、俳句にかなり救われたなって思います。俳句がなければ、とめどなく悩んでいる性格だったと思うんですよ。

(「俳句」2015年9月号 KADOKAWA)

漱石さんの俳句と向き合いながら、改めて思ったのは、俳句というものの摩訶不思議、俳句というものは、恐ろしいくらい正直に、詠んだ人の心を映してしまう、ということ。小説にも随筆にも書かず、家族にも友人にも語らなかった、心のなかの密やかな部分でさえ、俳句は知らぬ間に写し取っている。わたしはことばの力を改めて教えられた気がします。ことば、というもののパワー。力あることばは、志あるものに宿る。百年後の誰か、百年前の誰かにも、恥ずかしくない俳句、あるいは生き方というものを、私たち俳人は課せられているのかも。そんなことを意識をさせられて、わたしは、背筋を伸ばします。すると、目の前の景色が、洗い立てのように、少しちがってみえてくるようです。

(「漱石さんの俳句」2006年 実業之日本社)

### 4 学習指導の実際

#### 【例1】

- (1) 2の大高 翔氏の「作品」からベスト1ないしはベスト3を選ぶ。
- (2) その理由を、俳句の言葉を根拠として書く。
- (3) 書いた根拠をもとに、意見の交流をする。
- (4) 選んだ俳句の鑑賞文を書く。

#### 【例2】

- (1) 一枚の写真（校舎内外の写真や学校行事の写真、光村図書教科書「単元の扉」の季節写真）を見て表現技法を使った俳句を作る。
- (2) 班で、句会を開く。

#### 【例3】

『ゼロから始める俳句入門』（大高 翔）を参考にして、表現技法を学習する。

### 5 参考文献

『こども俳句塾』 大高 翔 明治書院